

十二 ユダとその軍勢

ユダの裏切りの成り行きは、かれのかねての期待に反した風になってしまった。

かれはひそかに主を渡すことによってファリザイ人に好意を示し、裏切りの報酬を得ようとした。しかしイエズスの判決や磔刑については考えもしなければ企てもしなかった。ただ金だけを目あてにしていた。すでにかなり前からユダは二、三人のファリザイ人やサドカイ人と関係していたが、かれらは上手なお世辞でユダに裏切りをそそのかした。ユダは苦しい、また絶えず迫害を受ける生活にあきあきしていた。かれはすでに数ヶ月施し物を横取りして、裏切りの第一歩を踏み出していた。マグダレナが物惜しみせず、主に塗油したことは、かれの貪欲な心をひどく怒らせた。そして今やかれを極端な所まで駆りたてた。かれはかねがねイエズスの地上の国に希望を抱き、そこで有利な輝かしい地位を期待していた。しかしそれは実現しそうにもなくなって来たので、かれは物を集め始めた。困難や迫害が増すにつれ、結局イエズスは決して、帝王にならぬことがわかると、ことがだめになる前に主の敵とうまく関係を結んでおこうと考えた。そこでかれに「いずれにしろ、イエズスはもうあんまり長いことはないぞ」と大きな自信をもって放言していたファリザイ人に仲介者の労をとり、かれらとの関係をますます深めていった。また最近ベタニアで、かれらはユダにつきまとっていたので、ユダはますます深く墮落の泥沼に足をとられるようになった。そしてついに自分から大司祭たちの所に出かけ、実行を催促するまでになった。かれらはしかし、まだユダの提案を受け入れようとせずあらわな軽蔑をもってかれをあしらっていた。かれらは祭日の前の期間はあまり

に短すぎる、祭日にはただ混乱と暴動が起きるばかりだといった。しかし衆議所の議員たちは裏切り者の提案を考えていた。不敬なる秘跡の拝領後、悪魔はすっかりユダを手に入れてしまった。ユダは実に極悪非道のことを成し遂げるために立ち去った。最初ユダは、以前からいつもかれにお世辞を言っていた仲介者の所に行ったが、かれらはこの時もユダを偽善的な親しきで迎えた。そこへ他の者も加わり、ついにアンナとカイファまでも出て来た。しかしこの二人はかれを非常に嘲笑い、軽蔑的にあしらった。みなはまだユダを完全に信用していなかったもので、実行をためらい、その成果を疑っていた。

わたしは地獄の国も同様に一致していないのを見た。サタンはイエズスを憎んでいたので、罪なき者を死に至らしめることによるユダヤ人の犯罪を望んでいた。しかしサタンは、自ら助かろうとされぬ罪なき主の死について、何か内なる恐れを抱いていた。サタンは主が罪なくしてお苦しみになるのをねたんでいた。わたしは悪魔が救世主の敵に憤りと憎しみを焚きつけているのを見た。しかし同時に、サタンは二、三の者に、ユダは卑劣漢だということと、祭日前には裁判の手続きを終えることが出来そうもないという考えを注ぎ込んでいるようにわたしには見えた。

それでかれらは各自の意見をたがいに戦わしていたが、二、三の者がユダに「奴をきつとつかまえることが出来るか、奴は武装した一団を持っていないか」と尋ねた。恥ずべき裏切り者は答えた。「いや、かれはたしかに、十一人の弟子とだけいます。かれ自信全く勇気がなく、それに他の十一人も本当の臆病者ぞろいです。」なおまたかれは言った。いまこそイエズスを捕らえるべきだ。以後は永久に捕らえられない。今となっては自分もはや主の所に戻る事が出来ないから、他の機会にかれを渡すことは不

可能だ。すでに最近、特に今日はイエズスや使徒たちが、さぐるような言葉を自分に言いかけた。かれらはどうも今度の計画を感じているように思われる。しかも今となつては、もし自分が再び戻っていけば、殺されることは疑いない。そしてかれはなお続けた。かれらが主を捕らえることを今決定しなければ、主はきっと逃げ自分を帝王と呼ばせるために、その帰依者の大軍をひきいて戻って来るであろうと。

こうしてついにユダはかれの意見を押し通した。一同はかれの案内でイエズスを捕縛する提案に同意した。そしてかれは裏切りの報酬銀三十枚を受け取ったのである。

その時からかれらはユダを厳重に見張り、かれが捕縛の全計画を実行し終わるまで、決して目を離さなかつた。それから三人のファリサイ人はかれについて神殿の護衛兵のいる広間に行った。護衛兵はみなユダヤ人ではなく、いろいろの他国人もいた、さてすべての打ち合わせができ上がったので、ユダはまずファリサイ人の下僕一人を連れて、晚餐の広間にイエズスがまだいるかどうかを確かめるために走った。主がオリーブ山に出かけて行く時、すぐ門のそばで捕らえることが出来るだろうからである。

ユダが裏切りの報酬を得てから、すぐに一人のファリサイ人が出て行き、主の十字架を作る木材を手に入れ、これを一応作り上がらせるために七人の奴隷を送り出した。なぜなら次の日は祭日が始まるので、もはや時間はあまりないからである。かれらはそこから十五分ほど離れた建築場で、城壁の所にあつた木材を手に入れた。そこにはなお神殿の建築用材木がたくさんあつた。かれらは材木をカイファの家の裏に引きずって行き、そこで仕事を始めた。

ユダは帰って来て、イエズスはもはや晚餐の間にはいないが、きっといつもの習慣通り祈りをするためにオリブ山に行っているに相違ないと報告した。かれは自分にただ、小部隊をつけてくれるように強く要求した。さもなければ、弟子たちあまり早く気がついて暴動を起こす恐れがあるかも知れないからと。しかし隊が引き上げて来る際、必要の場合にはただちに応援することが出来るように、捕縛人を連行する道筋に三百人の兵を備えて置くようにと願った。またこの恥ずべき裏切り者は、イエズスは今まで、たびたび秘密な方法でその連れたちから突然見えなくなってしまうことがあったから、逃がさぬように大いに注意せねばならぬと言った。さらにかれは提案した。主をくさりで縛り、イエズスがそれを切らぬように、何か魔法を使うようにと。しかしユダヤ人たちはこれを軽蔑し退けた。「おれたちは何もおまえかららおせっかいをしてもらわなくてよい。おれたちが奴を一度捕らえたらこっちのものさ」と言った。

ユダは軍隊と申し合わせてかれがまず一人で園に入って行き、仕事から帰って来たようにして主に接吻をもって挨拶する、それから兵士が押しかけてかれをつかまえるということにした。しかしユダはあたかも兵士たちが偶然にもその時、来合わせたようにふるまい、他の弟子たちのように逃げるつもりでいた。かれはきっと混乱が起きるか、使徒たちが抵抗するか、あるいはイエズスが今までもたびたびやったように、何か特別の方法で逃げるに違いないと考えていた。かれがこう考えたのはファリザイ人のかれに対する態度がしゃくにさわったからで、毛頭自分の行為を悔やんだり、あるいはイエズスに同情したからではない。かれは本当に全くサタンに組してしまった。ユダはその同行者がかせや縄を持って行くことを喜ばなかった。恥知らずの獄吏などもいっしょに来て欲しくなかった。みな表面はかれの希望を容れた。兵士た

ちはイエズスを確実に捕縛するまではユダにしっかり目をつけ、決して逃げさせてはならないと嚴重に言い渡されていた。それはこの卑劣漢が金だけもって逃げる恐れがあったし、また夜半では探している者でなく、間違っって他の者を捕らえるおそれがあったからである。捕縛に差し向けられた部隊は二十人の兵から成りたっていた。その一部は神殿の番兵、他の一部はアンナとカイファの兵であった。かれらはほとんどローマ兵のような服装をしていたが、ローマ兵とは主としてひげで区別されていた。みな剣を帯び、二、三の者は槍を持っていた。またかれらは火籠のついている棒やチャンのたいまつを持っていたが、ただ灯鍋だけに火をともしていた。始め、人々は一大軍隊をユダにつけてやるつもりだったが、かれの反対にあつて兵士の大部分はオフエル市区に後退させた。さらに騒動が起きたり、主が取り戻されたりするのを防ぐために、あちらこちら町の横道に歩哨を配置した。

かくてユダは二十人の兵士と共に出かけた。人々はこの一行から少し離れて、縄やかせを持った四人の破廉恥な獄吏に後をつけさせた。かれらの二、三步後ろから、ユダが少し前から関係していた六人の役人がついて行った。かれらはアンナとカイファとに信用のあるおもだった二人の司祭と、ファリザイ人がわかからの二人の役人と、サドカイ人がわかからの二人で、みな救い主の悪辣な敵であった。二十人の兵士は道がオリーブの園とゲッセマネの園との間を通り抜ける所までユダと仲よく行った。かれらはユダに対して全く変わった態度を取りだした。ユダとかれらは争い始めた。